

パートナーに対する暴力のメカニズム： Dark Triad と生活史戦略による個人差に対 するアプローチ

KIIRE, Satoru / 喜入, 暁

(発行年 / Year)

2018-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第417号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2018-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(心理学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014618>

法政大学審査学位論文の要約

パートナーに対する暴力のメカニズム

Dark Triad と生活史戦略による個人差に対するアプローチ

喜入 暁

恋愛関係は、われわれのライフコースにおける多くの対人関係の中でも、排他性、性関係性などを伴う特徴的な関係性である。このような関係性で発生する対人葛藤や、それに基づく暴力は、親密なパートナー間暴力（intimate partner violence: IPV; ドメスティックバイオレンス、デートイングバイオレンスなどを含む）と呼ばれ、社会的な問題の一つとして指摘される。一方で、研究の発展や臨床場面への応用という面では未だに課題が多い。特に、IPV のメカニズムに関する研究では、個々の IPV リスクファクターに注目がなされており、それらを統合するアプローチがなされていない。本研究では、このような現状に鑑み、IPV のリスクとなる個人特性としてのパーソナリティを明らかにし、同時に、その進化的要因にアプローチする。つまり、IPV の基礎的研究として、これまで個別に明らかにされてきた要因（至近要因：ある心理メカニズム、行動パターンの直接的な要因）をパーソナリティの観点から包括的に説明できることを示し、IPV とそのリスクファクターおよびパーソナリティとの関連の進化的基盤（究極要因：ある心理メカニズム、行動パターンの進化的適応機能としての要因）を明らかにすることを目的とした。

第1章 IPV, Dark Triad, 生活史理論

第1章では、IPV, Dark Triad についての現状の研究をそれぞれ概観し、今後の発展性として進化的基盤の検証の必要性を示した。IPV のリスクとなる至近要因は、他者に対するネガティブな感情、攻撃性や衝動性、反社会性などに加え、恋愛関係の不安定性、性関係の非制限性や、精神的・身体的な不健康さなどが挙げられた。一方で、IPV が発生する状況は、パートナー関係が崩壊する可能性が顕在化する場合に特に顕著であることから、進化的適応の観点から IPV はパートナー関係維持の一つであるということが指摘されている。ただし、同時に、パートナー関係維持行動として IPV を選択することは、自身が社会的な排斥を受けたり、評判を落とす可能性などから、稀であることも同時に指摘されている。ここで、パートナー関係維持行動や、特にその行動の選択肢から IPV を選択することには個人差が生じる。また、実際に IPV のリスクファクターとして示された至近要因は、多くが個人特性に影響される。これらの至近要因を包括的に捉える個人特性として、Dark Triad が挙げられることが示された。Dark Triad は社会的に望ましくない特性を備えるパーソナリティであるサイコパシー、ナルシシズム、マキャベリアニズムの集合的概念である。冷淡さ、他者操作性、自己中心性をその核とするが、特に、Dark Triad は暴力を促進する

と考えられる特性に加え、恋愛関係や性関係の不安定性や、精神的・身体的不健康を示し、IPV のリスクファクターを包括する特性である。したがって、IPV の個人差を説明する至近要因として、Dark Triad が包括的な要因となりうる可能性が示された。また、本研究では、わが国でも実際に Dark Triad の知見が再現されるかどうかを、5 因子性格モデルとの関連性を通して検証した。さらに、Dark Triad の進化的基盤には、生活史戦略の個人差が反映されていることが指摘されている。特に、IPV のリスクファクターや、Dark Triad の心理メカニズム・行動パターンは、生活史理論における早い生活史戦略を反映する。したがって、Dark Triad の個人差や、パートナー関係維持行動として IPV を選択することの個人差の究極要因として、生活史戦略による説明が可能であることが示唆された。

第2章 測定尺度

第2章では、第1章のモデルを検証するため、本研究で扱う概念の測定に関する研究を行なった。まず、IPV の測定については、わが国において測定尺度が確立しておらず、特に、精神的暴力の多様性が測定されていないことが指摘されてきた。そのため、本研究では3つの調査を通して、IPV を測定する尺度を作成し、妥当性を検証した。調査1では、18-39歳の現在交際中である一般サンプルを対象とした質問紙調査を実施し、IPV 尺度項目の選定と尺度構成に加え、デモグラフィック特徴である年齢、性別、学歴、および行動特徴である飲酒の程度、喫煙の程度との関連を検証した ($n = 598$)。さらに、潜在ランク分析による IPV レベルの有意義的カテゴリ数の推定を行なった。分析の結果、IPV の7形態（身体的暴力、間接的暴力、支配・監視、言語的暴力、性的暴力、経済的暴力、ストーキング）を各3項目で測定する尺度を作成した。また、高次因子分析により、IPV の各形態の高次概念として単一の一般 IPV が仮定できることを示した。加えて、全項目の得点を用いた潜在ランク分析により、IPV のレベルを3ランクに分類可能であることを示した。また、各変数との関連では、概ね先行研究を支持する結果が示され、したがって、妥当性が検証された。なお、調査1は、平成25年度から27年度の科学研究費補助金（基盤研究 C- 25380949, 研究代表者: 越智啓太）の助成を受けて行われた研究のデータの供与を受け、著者が再分析したものである。調査2では、大学生を対象とした質問紙調査を実施し、パーソナリティである境界性パーソナリティ傾向および反社会性パーソナリティ傾向と IPV との関連を検証した。なお、交際経験のある参加者を分析対象とした ($n = 344$)。分析の

結果、これらのパーソナリティ傾向は多くの IPV 形態と先行研究を支持する関連を示し、したがって、妥当性が検証された。調査 3 でも大学生を対象とした質問紙調査を実施し、交際経験のある参加者を分析対象として ($n = 130$)、進化的行動パターンであるパートナー関係維持行動との関連を検証した。分析の結果、各 IPV 形態と各パートナー関係維持行動とのほとんどの組み合わせで先行研究を支持する関連が示され、したがって、妥当性が検証された。

また、生活史戦略の指標である K-factor を測定する Mini-K の構造について、1 因子構造の問題点が指摘されてきた。また、Mini-K の邦訳版である Mini-K-J の妥当性検証では、一般サンプルを対象に、遅い生活史戦略を反映する変数が主に用いられていた。そのため、本研究では大学生を対象とし ($n = 467$)、Mini-K-J は、複数の下位因子に加え高次概念として単一の K-factor を仮定できるかどうかを検証し、早い生活史戦略を反映するパーソナリティである、境界性パーソナリティ傾向、反社会性パーソナリティ傾向、Dark Triad、また、同様に早い生活史戦略を反映する行動指標である、これまでの交際人数、喫煙の程度、飲酒の程度との関連性によって妥当性を検証した。分析の結果、1) Mini-K-J は、5 つの下位因子に加え、単一の高次因子として K-factor を仮定した高次因子分析モデルにおいて、良好な適合度を示した。また、2) 大学生を対象とした場合に、Mini-K-J で測定された K-factor は、早い生活史戦略を反映するパーソナリティとの理論的に整合する関連を示したが（サイコパシー、境界性パーソナリティ、反社会性パーソナリティは早い生活史戦略である）、行動指標は、喫煙の程度との弱い関連を除き、明確な関連性が示されなかった。したがって、Mini-K-J を大学生に実施することは可能であるものの、行動指標を扱う場合には注意が必要であるだろう。

第3章 モデル検証

第 3 章では、第 1 章での理論的背景を踏まえ、また、第 2 章での測定尺度に基づき、2 つのモデル検証による実証研究を行なった。ここで、Dark Triad はパーソナリティ概念であるため、年齢に制限されないと考えられる一方で、IPV およびパートナー関係維持行動は行動指標であるため、K-factor との関連を検証するにあたり、大学生への適用が適切か否かという問題が持ち上がる。しかし、交際関係は大学生以前に形成されることが多くあること、パートナーに対する暴力は、大学生においても見られることが示されているため、

使用することとした。

モデル検証 1 では、大学生を対象に質問紙調査を実施し、交際経験のある参加者を分析対象とした ($n = 344$)。はじめに、IPV の多くの至近要因を包括すると考えられるパーソナリティ群として Dark Triad を取り上げ、IPV との関連を検証した。分析の結果、Dark Triad が IPV のリスクとなることが示唆され、特に、Dark Triad の内のサイコパシーがこの関連に寄与した。一方で、マキャベリアニズム、ナルシシズムは、サイコパシーを統制した場合には、IPV との関連はほとんど示されなかった。次に、究極要因の効果を示すため、Dark Triad と IPV の関連が、K-factor に媒介されるかどうかを検証した。分析の結果、男性において、Dark Triad の内、特にサイコパシーが早い生活史戦略を媒介して IPV と正の関連を示した。サイコパシーは早い生活史戦略をとる代表的なパーソナリティであり、先行研究の知見を支持するとともに、早い生活史戦略が IPV のリスクとなることが示された。しかし一方で、女性において K-factor の媒介効果は示されず、サイコパシーから IPV への正の直接効果のみが示された。したがって、男女によって IPV の進化的機能が異なる可能性が考えられる。ただし、サイコパシーから IPV への間接効果の係数は性別にかかわらずに正であった。今後の研究では、パートナー関係維持行動としての IPV が男女でどのような進化的機能を持つのかという点について明らかにする必要があるだろう。

モデル検証 1 では、Dark Triad と IPV の関連に加え、その進化的基盤としての生活史戦略の影響を明らかにした。しかし一方で、IPV がパートナー関係維持行動であるか否かを含めた検証がなされていない。そのため、続くモデル検証 2 では、K-factor, Dark Triad から IPV への効果はパートナー関係維持行動に媒介されるかどうかを検証した。また、モデル検証 2 は、次の点でモデル検証 1 とは異なる。すなわち、1) モデル検証 1 では観測変数として各変数同士の関連性を示したが、モデル検証 2 では、各観測変数から抽出される潜在変数間の関連性を検証した。また、2) モデル検証 1 では K-factor を媒介変数として扱ったが、究極要因である生活史戦略はあらゆる至近要因に影響する根本的な要因であると想定し、モデル検証 2 では、K-factor から IPV への効果が Dark Triad, パートナー関係維持行動に媒介されるかどうかを検証した。大学生を対象とした質問紙調査を実施し、交際経験のある参加者を分析対象とした ($n = 380$)。分析の結果、K-factor から IPV への直接効果に加え、Dark Triad, パートナー維持行動を媒介した間接効果が示された。これらの結果から、早い生活史戦略は究極要因として IPV を促進し、また同時に、この関連は至近要因としての個人差である Dark Triad と、IPV の究極要因であるパートナー関係維持行

動に媒介されることが示された。

第4章 総括と展望

第4章では、一連の研究の知見をまとめ、限界点と今後の展望についてまとめた。これまでの IPV メカニズムに関する研究と比較して、本研究は、至近・究極両要因に着目し、至近要因として Dark Triad が、究極要因として早い生活史戦略がパートナー関係維持行動とその一つであると考えられる IPV を促進することを示した。一方で、限界点として次の点が挙げられるだろう。すなわち、個人特性のみに着目していること、横断的な研究に留まっていること、女性の IPV の進化的基盤が不明瞭であること、実務応用には至っていないこと、これまで示された IPV リスクファクターの効果を含めた検証がなされていないこと、構成概念の概念的枠組みに関する問題、サンプルの一般性に関する問題、自己報告によるデータ収集方法であることの問題などが挙げられる。しかし、このような限界点が挙げられるものの、究極要因と至近要因の両面に着目した研究として、本研究の知見は今後の研究発展に寄与すると考えられる。今後の研究では、これらの限界点に対処し、IPV の本質的理解の促進に加え、臨床的・教育的応用につなげていくことが必要だろう。

最後に、人間の本質的理解に向けた、至近要因、究極要因の両面から IPV メカニズムを含む心理的メカニズムや行動パターンへのアプローチの有効性を論じた。すなわち、進化心理学的視点は、さまざまな心理的メカニズム、行動パターンについて、自然選択理論に基づき、進化的適応機能という観点から合理的な説明を導き出す。また、このような説明は、ある特定の心理学分野に限定されるものではなく、分野横断的に共通し、人間理解における統合的視点を提供するものと考えられる。しかし、心理学領域においてこれまでさまざまな現象が解明された一方で、至近要因に留まる知見は多くある。至近要因と同時に、究極要因にアプローチしてこそ、ヒトの本質的理解に一步前進すると考えられる。さらに、進化心理学的アプローチにおいても個人差へのアプローチは、なおざりにされてきた一方で、研究対象とすべき重要な要因である。ヒトに一般的な進化的機能に加え、その機能の個人差として生活史戦略を導入することで、様々なヒトに表出される現象の統一的なメカニズムの解明の可能性と、各個人に特有な側面に踏み込んだ、より詳細な知見を示すことが可能となると考えられる。また、そのようなアプローチが、研究を展開し発展させる上で重要な領域であると考えられる。